カトリック高松教区報

2007年11月11日(第120号)
発行所 カトリック高松司教区 広報委員会
〒760-0074 高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659 FAX 087-833-1484
Email
教区:tkcuria@mxi.netwave.or.jp
広報:tk-koho@mxi.netwave.or.jp
生涯養成:yosei@takamatsu.catholic.ne.jp
http://www.takamatsu.catholic.ne.jp/

高潔に生き殉教した結城了雪神父

信徒や市民700人に感銘

キリシタン時代「信徒の教会だった」

今年の高松教区の大きな行事とあって、当日は四国四県をはじめ各地から信徒、修道者、一般市民ら約七百人がつめかけた。結城神父の高潔に生き宣教に命をかけ殉教した壮烈な生涯に感銘を受けた。

シンポは溝部脩司教が司会、三人のパネリストが問題提起の後、四人での討論によって結城神父の生涯、彼の生きた時代が浮き彫りにされた。

結城神父は徳島出身。このほど列福が決まった一八八殉教者のひとり。室町幕府の足利将軍・阿波公方の末裔として生まれた。その一生は厳しい十字架の道だった。禁教令下マニラに追放されたが、長崎に潜入、京都を中心に毎日命がけで宣教、迫害下の信徒を励ました。ついに捕らわれ、大阪で穴に逆さ吊りにされ三日目に殉教した。最後に「私に宿主はいない。ずっと森に住んでいた」と話し、世話になった信徒をかばい誰にも迷惑をかけず聖なる死をとげた。

またキリシタン時代の信徒は自分たちだけの共同体（組）をつくっており当時の教会はたしかに「信徒の教会」だったことも話された。討論の合い間には一六世紀の教会音楽も披露され、会場は荘厳な雰囲気に包まれた。

徳島でシンポジウム

シンポジウム「足利将軍・阿波公方の末裔ディオゴ結城了雪神父の生涯」（高松司教区主催）が九月一五日、徳島市藍場町の徳島県郷土文化会館で開かれた。（二面にシンポ詳報掲載）

主な記事

2～4面　シンポジウム関係
4～8面　地区便り
5面　司教室の窓から
7面　医療のともしび
8面　お知らせコーナー

はばたき

西の山並みに日が沈んだ後も、空はしばらく明るい。やがて茜色に染まった雲が次第に黒味を帯びていく。たそがれ、殊に秋のたそがれは閑寂でものわびしい。▲筆者もついに古稀を迎えた。まさに人生のたそがれである。これまであまり気にかけなかった「老い」と「死」が現実感をもって迫り、来し方に対する悔悟や感謝の想いが胸中を去来する。やり残したことはないか、死の準備はできているか・・・。▲トルストイの言葉に「死を忘れた生活と、刻々近づく死を意識した生活の間には、天と地の隔たりがある」とある。現在の心境は時宜を得た神の摂理ではなかろうか。過去にとらわれず、必要なものは神が与えて下さるという信仰のもと、残された日々を大切に生きなければならないことを痛感する。▲神を信じるものにとって死は自分の存在の終わりではなく、永遠の生命の始まりである。「人の目が見たこともなく、耳が聞いたこともなく、人の心に思い浮かんだこともない」すばらしい幸せを用意して下さっている。安んじて、すべてを神のみ手に。

一一月は死者の月。

誰にも迷惑をかけなかった

シンポ詳報

命がけひたすら宣教「来てよかった」参加者も好評

徳島で結城了雪シンポ

「来てよかった」「過酷な時代に教えのために生きた結城了雪神父様はりっぱです」「キリシタン時代や殉教のことは今の私たち信徒が立っているモトのところだから当時のことを知り感動した」。徳島でのシンポジウム出席者は高潮した顔で口々に感想を語った。

このシンポは、四国の人にむけた「宣教」も意識した開かれた集いにしようと、溝部脩司教の意図から地元の郷土史研究者もパネリストに迎えて、一般市民をも巻き込んだ広がりを見せた。

左から溝部脩司教、板東英雄氏
結城了悟神父、川村信三神父

まずパネリストの上智大学准教授の川村信三神父が「浄土真宗の講とキリシタン時代の組について」、長崎二六聖人記念館元館長の結城了悟神父が「結城了雪ひとのために生きる人」、地元県立城東高教諭の板東英雄氏が「徳島文書と結城了雪」をテーマに問題提起。その後溝部司教の司会で討論が繰り広げられ、歴史を振り返りながら今の教会のあり方も模索された。

穴に逆さ吊りにされ殉教

結城了悟神父は「結城神父は一二歳でセミナリオに入り、よく学ぶ人だった。日本文化をよく知り、外国語もわかる国際人だった。一六一四年マニラに追放され、そこで司祭になった。翌年、禁教令下の日本に潜入、京都の教会に任命された。そして四回の大変な旅を経験する。追放された信徒のため津軽まで行き、牢屋で告白を聞き、聖体を授ける。また佐渡、金沢など各地へ行き信徒を励ました。帰ってローマへ報告したが、自分の苦労については一言も書かなかった。司祭が一人になってもなお活動を続けた。最後に捕らえられ穴に逆さ吊りにされ殉教するが、「私に宿主はない、いつも森に住んでいた」と語り、世話になった人々のだれにも迷惑をかけなかった」と結城神父の潔い人生を語った。

川村神父は「キリシタン時代、司祭が少ない中で信徒たちは自分たちだけの共同体をつくっていた。民家に祭壇を作り、一緒に祈り、リーダーがカテキズムを教え、伝えるべきものを伝えていく。このような共同体（組）が各地にあった。この共同体づくりのモデルはすでに日本にあった。浄土真宗本願寺派の「講」が全くよく似ている。一六世紀の二つの宗教が同じ組織を持っていたことは興味深い。それは信仰対象がひとつの神であったこと、また飢餓の時代で、共同でその危機を乗り越えようとする時代背景があった。一緒に共同で信仰を守ろうとした時代であり、そこから一八八人の殉教者が生まれた。当時の教会はたしかに信徒の教会だったといえる」と述べた。

妹の祐賀も度々取り調べ

地元の板東教諭は「一六四三年の宣教師が作成した布教地図に阿波に教会があるとされている。当時、信仰の母体があったのだろう。江戸時代になりキリシタン弾圧が激しくなると、関連文書が多くなる。蜂須賀家文書によると、寛政年間に一八の家系が転びキリシタンとされているが、そのほとんどが断絶の運命をたどっており、徳島での厳しい取り締まりの状況がわかる。結城神父の妹祐賀（阿波公方義種の妻）についても二回も取り調べを受けている。文書によると一族の人々が宗門ゆえにたびたび詮索を受けており、当時の厳しい状況がわかる」と述べた。

その後、溝部司教と三人のパネリストとの討論があった。その中で結城神父について、「その生涯はひとつの線で貫かれていた。強い意志を持って自分の道をひたすら進んだ人だ」、殉教について「命をかけ証をしたすさまじさ、大きさを感じる」など語られた。

また結城神父は死の前に「だれにも迷惑はかけなかった」といっているが、事実を見ると、一族みんなに迷惑のかけっぱなしだった。当時、拷問され信徒同志が訴え合うということがあり、彼はそれが教会共同体を壊すものだと知っていた。彼には一言も漏らさず責任を負って死んでいく心意気があったのだろう。「迷惑をかけなかった」と語った言葉に彼の高潔な生き方を感じるとの考えも述べられた。

美しい歌声が会場を魅了

また、最後に四国に潜入して捕らえられるまで二カ月間も隠れていられたのは足利家の援助があったに違いない。それがなければ生きていけなかっただろうとの見解も語られた。

今回のシンポについては、多くの人々が集まり、四国のパワーを感じたとの感想やこれを機に新しい動きのきっかけになればとの声や殉教者調査のさらなる広がりへの期待も出された。

討論の前後には一六世紀の教会音楽「天正音楽」が披露されその美しい歌声に会場は魅了された。宮崎中世音楽研究会（指揮・竹井成美氏）の出演。ミゼレレ、タントゥムエルゴ、アヴェマリアなど、結城神父も聞いただろうしセミナリオで歌ったかもしれない。宗教的で荘厳な歌声の中でシンポの幕は閉じられた。

シンポジウム協力に感謝

徳島シンポジウム実行委員会
代表者　Srメリー・ギリス

高松教区報が一一月初めの発行予定だった関係で、徳島シンポジウム開催から六週間経過後となってしまいますが、これを機会に教区民の皆様に徳島シンポジウムへの協力御礼とご報告を申し上げたく文章で述べさせて頂きます。

本当にありがとうございました。多くの方々のご支援とご協力によって徳島シンポジウムは、溝部司教が心から念願しておられた「宣教」に繋がった行事になれたに違いありません。徳島新聞によりますと、約七百名が参加

したと書いてありました。私の概算ですが、高松教区以外からも二百名を超える方々が参加されたように思います。その中の何人かの方々の感想の声も耳にすることができましたが、皆様は大変喜んでおられました。特に徳島県郷土史家の方々の評価は高かったように感じられます。

この行事開催に当たり教区民の皆様には、司祭評議会と宣教司牧評議会を通して特別献金の要請がありました。そして皆様方は、寛大な心でこの要請に快く応えてくださいました。溝部司教始め、個人から寄せられたご寄付も多々ありました。収入に関して言えば目標額を上回る金額、全額で二四〇万八、九二七円が集まりました。支出に関しては、記録を残す作業（テープ起こしとビデオ作成）が終了すると会計報告は可能になります。上記収入金額で、今回の支出金額は十分賄えると思われます。会計報告が完成次第、各小教区に報告書を送る予定であります。

また特に徳島地区の皆様方には、受付、会場案内、接待、保育室の御世話、介護等多くの分野を引き受けてくださいました。衷心より御礼申し上げます。

ご一緒にゆっくり参加できなかったことは残念でしたが、皆様のご奉仕なしにこの行事を遂行することは不可能でした。本当に有難うございました。

二月九日、阿南教会での第一回実行委員会以来、全部で六回準備会を開き準備してまいりました。溝部司教が考えてくださった、豊かな行事内容を実行可能にするのが委員会の重大な務めでした。参加して頂いた皆様方に、心から満足していただけたことが、何よりも私たちの大きな喜びです。

来年の一一月二四日は列福式です。これからの一年の間、徳島で体験したことを更に深めていくことができるように、生涯養成委員会の中で考えていく所存です。どうぞお祈りで支えてください。

教区民の皆様、本当にありがとうございました。

研究の深化を期待して

文学博士　三好昭一郎

シンポジウム「殉教者ディエゴ結城了雪神父の生涯」が九月一五日に郷土文化会館で開催されて参加させてもらった。まず会場に溢れんばかりの人たちによって、シンポが盛り上げられたことに、ある種の感動を覚えた。ディオゴ結城が来年にも福者に列せられることの予祝行事であるこの度のシンポは、信徒としても宗教史に関心を寄せる市民にとっても、きわめて興味深い試みであったといえるであろう。

わが国の近世初期を専攻する私としても、当然のように切支丹史と江戸幕府による弾圧史、とくに徳島藩の動向などに関心をもつだけに、このシンポに期待し参加した。ところでカトリック高松教区司教の溝部脩氏の司会で三人のパネリストの問題提起とパネル討議は私に新たな課題を与えていただき、大きな刺激を得たことに感謝しておきたい。紙数の都合で詳述できないので、もっとも興味をもつ上智大学の川村信三氏の「浄土真宗の講とキリシタン時代の組について」の提起とパネル討議をめぐって、私の考えたことの一端を述べて、今後の研究と議論の深化を期待したいと考えている。

川村氏が豊後における切支丹の組集団が、それ以前の門徒の講（道場）を前提として形成されている史実確認を経て研究に取り組んだと述べられ、門徒衆と切支丹は共通して在俗ともいうべき信仰集団を形成し、その運営を行う共同体であるとする、かなり大胆な研究成果を報告された。ただそうした信仰的共同体と本願寺とか教会、つまり教団との関係に到らなかったことに、少し消化不良の思いがあることと、いま一つは講または組という信仰的共同体が中世末以来に組織化されたと考える以前に、荘園内部の名（みょう）体制を強化する必要から、他力本願や神の救いに求めたと私は考える。それを媒介するものが、まさに石山本願寺でありイエズス会の活動であったのではないであろうか。また講や組の共同体が形成されると、一向衆徒と結んだり、切支丹の共同体を利用する戦国大名も出現するが、この大名勢力の消長がこれら共同体に与えた影響は大きいものがあった。そのように一五世紀後半から一六世紀前半における村落共同体と信仰、さらに政治の動向は複雑な離合集散を繰り返しつつ、家光政権の鎖国に至っていることについて、いま一度検討することの必要なことを痛感させられたことも、私にとって大きい収穫の一つであった。

以上の整理をすることによって、はじめてディオゴ結城了雪が阿讃の藩境に潜伏し、布教し続けることが可能だったという、私たちとして一番知りたい疑問に対して重要な手掛かりが得られるように思う。なお隠れ切支丹も興味深い問題であるが、それと比較する上で薩摩藩の隠れ門徒の存在も気になってくる。まずは研究の深化を願いたいものである。

郷土の方々と思いを共有

鳴門教会　土居和久

さる九月一五日、徳島県郷土文化会館において、福者に列せられるディオゴ結城了雪神父の生涯をめぐるシンポジウムが開催されました。秋とは名ばかりで、蒸し暑く時折の雨まじりのあいにくの天候でしたが、信者以外の方を含め、四国全体をはじめ高松教区外からも多くの方が参加され、会場は静かな熱気に満たされていました。

宮崎中世音楽研究会のコーラス

溝部司教様の司会のもと、パネリストの川村信三師、結城了悟師、坂東英雄先生のお話を通して、信徒の組を中心として固い結束の元に運営されていた当時の共同体の姿、高貴な家柄の出身でありながら、日本の各地でひとのために生きた結城神父の姿、幕府中枢による過酷なキリシタン詮議の中で、かつての仲間に裏切られながらも、最後まで自身は決して仲間を裏切らなかった結城神父の姿が浮かび上がってきました。

私は鳴門に住んで二〇年になりますが、この阿波の地にかってこのように鮮烈な生涯を送られた神父様がいたことを全く知りませんでした。今回のシンポジウムでは、四百年前に生きた結城了雪神父を通じて、信者さん以外の郷土の方々とも思いを共有できたように感じます。

講師の先生方、準備に当たられた皆様、ありがとうございました。今後も様々な形で、今回のようなオープンな試みが続けられることを願っています。

シンポジウムの後、宮崎中世音楽研究会の方々による、天正音楽の柔らかな歌声に送られて会場を後にしました。

地区だより

歌って踊って平和を語ろう
阿波踊りin徳島

徳島教会　三原直輝

二〇〇七年夏、今年も街中から「よしこの」の音色が聞こえてきた。阿波踊りの始まりである。昨年と同様、この時期に多くの人たちと踊りを観賞し、平和について考え、語り合う時を持つことができた。今年は、八月一二日（日）～一三日（月）の二日間の日程で行われ、四国各県から二〇名近くの司祭・修道者、若者、信徒たちが徳島に集い、さらに、大阪から松浦悟郎司教様をお迎えした。

初日の夕方、各地からみんなが集まり、自己紹介の後、夕食を済ませ、いざ街中へと繰り出した。今回も阿波踊りは初めてという参加者もいて、人ごみの多さと街中の音色に驚いていた。まず、阿波踊りを体で感じようと、にわか連に参加した。にわか連とは、誰もが気軽に阿波踊りを踊ることのできる場であり、参加者は、手足の動きが合わずに苦戦しながらも、「よしこの」のリズムに合わせて、見よう見まねに楽しく踊り、生き生きとした表情が印象的だった。それから、街中を散策した後、桟敷席でゆっくりと踊りを観賞した。桟敷では、有名連の美しい踊りやパフォーマンスに魅了され、拍手喝采であった。参加者は、「踊る阿呆」と「見る阿呆」の両方の楽しみ方で踊りを大いに満喫し、笑顔が全面にあふれ出していた。

楽しく踊る参加者

二日目は、平和について考える時を持った。まず、高知の諏訪神父様に東アジアの社会情勢の視点から平和についてどう考えるかについてのお話をしていただき、次に、松浦司教様が、今起きている国際問題の出来事から、憲法九条の必要性や我々がどういう方向に進んでいけばいいのかを具体的な例を挙げながら分かりやすくお話してくださった。その後、数名ずつに分かれての分かち合いが行われ、それぞれのグループで平和に対して我々がどう取り組んでいけばよいのかについての活発な意見が交わされた。ある人は、「今回の講演で色々なことを知った。これから平和を考える上でもっといろんな事を知る必要があると感じた。」と語られ、今回の講演が平和問題への関心を注ぐとてもいい機会となったようだ。そして、昼食後、平和への願いをこめた祈りのミサで集いを締めくくった。このあと、希望者は、有名連によるステージでの『選抜阿波踊り大会』の見物を行った。昨日の桟敷席での踊りよりもさらに電飾等の演出が凝って、見ごたえのあるものであり、参加者はステージに食い入るように見入っていた。

今年も、このような集いを持てたことに感謝したい。松浦司教様は、「踊りと平和の集いの組み合わせはとてもすばらしい企画である。」とおっしゃられ、また来年も『歌って踊って平和を語ろう！』の名の下に、このような集いを持てればと思っている。最後に、今回の集いで協力してくださったすべての方々に改めて感謝の意を表します。ありがとうございました。

小冊子
ペトロ岐部と一八七殉教者

中島町教会　岡副実佐子

殉教ということの意義を深めることになったこの小冊子に出会って、神を愛することが如何に麗しく、馨（かぐわ）しいことであるかを知った。それは、この世に命をいただいて生きること、その生命の尊さと使命は計り難く、聖霊の光に照らされて、悟ることが出来るように思う。

左が筆者の岡副さん
右は中島町教会の城戸昭彦氏夫妻（於中島町教会）

日本のキリシタンの歴史に刻まれた殉教者の方々の中の少年と、幼い子供たちに光を当ててみる。教会共同体の一人として、今の時代に生きる私たちは、キリシタン弾圧によって殉教した方々の中に、命の輝きを見る。その中にいる幼い三才～一二才の子供たちは、楚々として信仰の証人となっている。

特に心に刻まれるのは、京都の殉教者、母と子の奉献では、ディオゴ結城神父が牧者となって、信者たちが貧しさと一途な信仰によって、互いの絆を深め、寄り添って共に生きた記述には、その内の一五才以下の子供たち一一人が、母親と共に火刑によって殉教した奉献は、命の河となったと結んでいる。この時代に生を受け信心深い両親と、豊かな自然に育まれて育った子供たちには、故郷の記憶、イエスさまへの信頼と希望は、癒しになったことであろう。

今回の一八八殉教者の中に含まれていない多くの殉教者の方々も毅然として、処刑と火刑によって、キリストの証人として天の国に召されたことが偲ばれる。キリストの信仰に生きる現代の私たちに語りかけているのは何か。現代には、心の殉教、肉身の殉教の両方があるように思う。主イエス・キリストへの信頼と希望と愛とを心に刻み、楚々として生きていきたいと思う。

ペトロ岐部と187殉教者の列福式
開催日決定

「ペトロ岐部と187殉教者」の列福式は教皇庁の主催により、2008年11月24日（月・祝）に長崎において行われ、列聖省長官が教皇特使として派遣されることが発表されました。

列福式が日本で行われるのは初めてで、列福式実行委員会（委員長：髙見三明長崎大司教）では、多くの方々の参加が可能な会場を検討中です。

佐野すみ子先生のこと

中島町教会　沖　郁子

去る二〇〇七年六月二五日、佐野すみ子先生が九四歳で天に帰られた。

佐野先生は、その生涯の半分近くの四〇年余りを、高知盲学校で、目の不自由な子供達の教育のために捧げられた。

一九五〇年（昭和二五年）私は八歳になっていた。盲学校の小学部に入学するため、今の四万十市から、父に連れられて高知にやって来た。今でこそ四万十市の中村駅からは特急列車で一時間四〇分もあれば高知に来られる。然し当時はバスと列車を乗り継いで七時間もかかった。私は待ちに待った「一年生」になったのだった。父はたった三晩泊まって帰っていった。生まれて初めて親の声の聞こえない所に置かれることに気付いて「ついて帰る！」と言って泣いた。「一年生」になって、嬉しかったことも、夏休みまで頑張る決心をしてうちを出て来た事も、どこかへ行ってしまった。両親と別れる辛さに代えられるものは無かった。父は「夏休みには迎えに来る。それまで、先生や寮母さんのおっしゃることをよく聞いて、頑張るように。」と言ってさっさと帰っていった。私は寮母さんに「連れて帰って欲しい」と頼んだ。「今日はもう遅いからあした連れて帰ってあげる。」と寮母さんは言った。私はそれを信じた。次の日の昼間は元気に遊んでいたが、夕方になると、連れて帰ってもらえなかったことに気付いて泣いた。「今日は遅くなったから、あした連れて行ってあげる。」と寮母さんは言った。私はその言葉を信じた。そんなことが何回か繰返された時私は、佐野先生と、寮母さんの会話を聞いた。「あの子を、一日延ばしに騙してはいけません。夏休みまで帰れないのだという事を、ちゃんと納得させてください。」「あまり可哀そうですから・・」「可哀そうだからこそ、納得させなければいけません。」私はどんなに泣いても帰してはもらえない事を悟った。

五年生になる時の春休み、佐野先生がお手紙を下さった。私達の担任になったことが書かれていた。私は嬉しかった。隣の教室で上級生が叱られたり、お説教されたりしているのが時々聞こえてきた。いつしか、佐野先生に習いたいと思うようになっていた。宿題は毎日山程あったし、よく叱られもした。厳しく叱られた時でも、佐野先生の言葉は「自分の親でもこのように言うだろうな」と思って素直に聞けた。

佐野先生が、熱心なカトリックの信者さんだということも、上級生から聞いていた。私は先生にお願いして、教会に連れて行っていただくことにした。数人の友達と一緒に中島町の教会に行き始めた。ミサの後、盲学校の子供達をひとクラスにして、指導して下さった。教会から学校迄歩いて帰りながら、佐野先生はいろいろなことを話して下さった。あるとき同じように歩いて帰りながら「私達は毎日毎日の生活が祈りなんですよ。」とおっしゃった。そのとき私は六年生になっていたが、その意味を十分理解できなかった。「大切な言葉」として、心の奥に残り続けた。中学部に進んでからは、佐野先生とお話しする機会は少なくなった。職業を身につけて、盲学校を卒業してからは、年に何度もお目にかかることはなかった。

卒業して二〇年も経った頃だったろうか。私は友達と、佐野先生をお訪ねした。お抹茶をいただいた後で先生は次のようにおっしゃった。「あなた達には済まないと思っているのですよ！若いときは無性に腹が立ってね。愛の鞭とか何とか言うけれど、そんなことはありませんよ。怒っているときはみな腹が立っているんですよ。教育者だなんて、そんなおこがましい事は思っていませんよ。私は仕事として携わってきたのです。本当に御免なさいね。」私はこれを聞いて「この方に付いて行きたい」と心から思った。いつか、クリスマスに因んだ講演会で、あるシスターが言われた言葉を思い出した。「本当に謙遜な人とは、罪人として神様の前に立つその同じ姿で人の前に立つことの出来る人のことです」と。

私はこの頃「毎日毎日の生活が祈りなのですよ。」という、佐野先生の言葉を味わい深く思い起こすようになった。そのように生きられたらどんなにいいだろうと思う。「主の平和」とは、そのようなことかもしれないと思う。然し、そのようでありたいと願いながら生きていくことも又祈りではないだろうか、などと思い巡らしていると、聖書の一節が浮かんだ。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。また、隣人を自分のように愛しなさい』」（ルカによる福音書一〇章二七節）

（点字翻訳　是永恒子氏）

左から筆者の沖郁子さん
点字翻訳者の是永恒子さん
いつも沖さんをエスコートしている
中村道子さん（於中島町教会）

司教室の窓から

とにかく暑い夏でした。四階の一室で三方を大きな窓で囲まれていると、暑さは耐えられない程です。おまけに屋上には冷房、暖房の装置機械がびっしりと並んでいて、手の施しようがありません。それでも、あるいはそれだけに秋の気配には敏感になります。秋が恋しくてならない感傷めいた気持ちにかられます。それでも今年の夏は実り多い夏でした。高松、徳島の合同ファミリー・キャンプ、広島の平和行進、平和旬間中の祈りとミサ、被昇天のミサと石原孫右衛門の除幕式、平和を語る徳島の集いと実に多くの行事がありました。関係者の方々に感謝します。汗をたっぷりと流した夏でしたが、汗をかかないで成果だけを求めるのは卑怯なのでしょう。司教館の四階にあるチャペルには、長崎の田平教会から持ってきた古いガラスで飾りました。古いガラスが見事に甦っています。一度ごらんになって下さい。古いものを捨てない、それを利用して新しいものに作り変える、これは人間が生きていく知恵なのでしょう。高松教区でもそうありたいものです。

教区長　溝部　脩　司教

命を尊ぶ「灯籠流し」に参加

今治教会　新居田大作

今年の夏は、記録的な猛暑の日々であった。そんな中、八月二五日愛媛県西条市加茂川沿いのメロディ橋たもとの河川敷で開催された「命を尊ぶ会」主催の「灯籠流し、祈りの集会」に参加し、さわやかで意義深い体験をした。

この会は、立正佼成会西条教会、伊曽乃神社、極楽寺ほか多くの宗教団体による宗派を超えた祈りの集会である。

平成一二年以来、毎年開催され今年で八回目を迎えたが、この度、カトリック今治教会が招かれた。今治教会の村上康助神父様が新居浜、西条の教会にも呼び掛け、東予三教会の神父と信徒合わせて二五人が参加した。

加茂川の河口に夕日が傾いた頃、神楽や法螺貝の合奏でオープニング。井上千賀司伊曽乃神社宮司の開会挨拶に次いで子供たちが祭壇に静静と献水、献茶、献花を捧げ祈りに移った。村上神父様をはじめ各宗派の代表者一三名が祭壇に上がり、参列者約四百人が一体となって合同の祈りが捧げられた。

この後、聖職者による「灯籠流し」が始まり、仮設の桟橋からは明かりをともした灯籠が祈りと共に流され一般参加者もこれに続いた。

祭壇上では「神道の祈り」、「仏教の祈り」と続き「キリスト教の祈り」を迎えた。

村上神父、岩崎神父、栃尾神父の三人と合田シスター、信徒会の矢邊、新居田の六名が登壇し、神父様達がそれぞれの祈りを順次唱えた後、カトリック教会からの参加者全員で「聖フランシスコの平和の祈り」を唱えた。

村上神父様にこの会の会長である井上宮司様から、「カトリックのお祈りは大変分かりやすいですね」とのお話を頂いた。

祭壇上の蓮の花、榊、大幣の間に十字架が安置されている。袈裟をまとった僧侶達、黒烏帽子に白装束の神主、それに司祭服のカトリックの神父が同じ祭壇で共に祈っている。

何という光景であろうか。全ての参会者にとって初めてみる姿だったと思う。お互いに関係のない存在ではなく、これこそがあるべき姿なんだと感動を覚えた。

昨年八月末、高松市で開催された第八回ＷＣＲＰ（世界宗教者平和会議）世界大会ポストコングレス・イン四国で大会委員長を務められた溝部司教様の開催挨拶の中に、次のような言葉があることを大会記録集を読んで知った。

「現代社会の一番大きな問題、それは命に関わること、平和に関わること、人間が生きる権利に関わること、こういうことは全ての宗教に共通した課題として、私たちに剣を突き付けております。四国で初めてこうしていろいろな宗教の方々とお会いできることはとても大きな意義があり、喜びとしております。この機会を単なる一回の打ち上げ花火にしないで、これを通して徐々にゆっくりとこの四国の土地に私たち宗教者が現代社会に与えるメッセージ、ならびに実践、これらを推進する第一歩になれば嬉しいと存じております…」と述べておられる。

その大会の精神が今回の私たちが参加できた「灯籠流し、祈りの集会」へと引き継がれたものであることが分かった。

月夜の加茂川にたくさんの灯籠が流され、花火も打ち上げられて、フィナーレを迎えた。

この催しの中心となって企画、設営、進行など、万全の配慮でご奉仕くださった立正佼成会をはじめ実行委員会のすべての皆様に感謝しながら帰路についた。

今治教会
聖堂へのエレベーター完成

今治教会のお聖堂は二階にあります。一九七二年に用地を拡張して戦後復興期の教会を取り壊し、教会堂と幼稚園を一体化した近代的な総合建築として竣工して以来、三五年になります。

高齢化社会が進む中でお聖堂へ上がる小型エレベーターの設置が懸案でした。計画・検討の末、去る七月に着工にこぎ着け、九月一日に完成しました。神父様をはじめ多くの皆様方のお力添えに信徒一同感謝致しております。

九月二日、ミサを終えてから皆がエレベーターの前に集まり「乗り初め」に先立って祝別の式が執り行われました。

村上神父様が「恵み深い神は、今日エレベーターを祝福する喜びを与えてくださいました。今治教会を訪れてお聖堂に上がる人に、あなたの恵みを注いでくださいますように」…と祈られ、聖書の朗読に続いて「高齢者、体の不自由な人、病人、幼い子供達があなたの家に上がり主の食卓を囲むことが出来ますように。今回のプロジェクトのためにお力添え下さった兄弟、姉妹の上に豊かな恵みが注がれますように」と祝別の祈りを唱えられました。

高齢の方々から順次初乗りをして、喜びを共にすることが出来ました。

神に感謝。

日曜学校教師研修会を終えて

徳島教会　河野恵理子

八月二五、二六日、第三三回高松教区教師研修会が開かれました。一日目はウェルシティ徳島で講話と親睦会、二日目は徳島カトリック教会でミサ、その後講話と総会が行なわれました。今回は東京からサレジオ会の河合恒男神父様をお迎えして「中高生の心に響く指導法」～忙しい中高生を教会に向かわせるために～をテーマにお話しくださいました。

河合神父と熱心に受講する参加者

河合神父様は元サレジオ学院、中高等学校の校長先生で、日本のカトリック教育の啓蒙に励んでいらっしゃって、最初お電話でお話した時は、厳格な少し近寄り難い雰囲気をお持ちの神父様かなという印象をもちましたが、当日お会いしたらその印象は吹っ飛びました。白いお髭の若々しいお姿で静かなお話しぶりは優しさに満ち、二日間の講話も淡々とした中に子供達に対する熱い思いが感じられました。（教育とは教え育てる事。教会学校は育師としての使命がある。相手とともに哀しみを共有することが若者に対してとるべき姿勢。かけがえのないひとり一人の命を大切に。若者の可能性を信じる者だけが教師になれる。学校とは違った場を教会が与えてあげなくてはならない。）等等心に染み渡りました。

残暑の厳しい暑い日差しの徳島の街を散策されたいと歩いて駅まで行かれる神父様を見送って二日間の研修が終わりました。最後に神父様が読んで下さった詩の一部をご紹介します。

笑顔を見せること、しっかり抱きしめる

ためのほんのわずかな時間、相手があなたを求めている唯一の最後の願いだったかもしれないそれらのことを、今はそんなことをしている暇はないと無視してしまったらきっと後悔することになるだろう。

だから今日、愛する人をしっかり抱きしめよう、そして耳元でささやこう　愛していることを、いつも大切な人だということを「ごめんなさい」「許してね」「ありがとう」と時間をとって伝えよう。そうしておけば、もし明日が来ないとしても、今日この日に後悔することがないだろう。

その日その日を丁寧に生きること、その日その日にその人の存在を喜びいとおしむこと、これこそすばらしい生き方です。

三年ぶり 四国でのMEウィークエンド in 高知「考える村」

ME四国コミュニティ代表
新居浜教会　鈴木　強・静枝

土佐くろしお鉄道の夜須駅から山道を車で二〇分ほど行ったところに、「考える村」という研修施設があります。そこは、自然に囲まれた絶景の場所で太平洋を一望でき、地下数百メートルから汲み上げた美味しい天然水も飲めます。今回マリッジエンカウンター（ME）ウィークエンドをこの「考える村」で、九月二二日（土）から九月二四日（月）の二泊三日で開催いたしました。四国で行われるのは、三年ぶりのことです。

四組のご夫婦と一人のシスターが参加をしてくださいました。関西から来られた三組のご夫婦と一人の司祭が参加者をリードしてくださり、まだ夏の蒸し暑さが残る高知で互いに向き合う豊かな時間を過ごしました。二泊三日のプログラムを終えた参加者の、その笑顔、その眼差し、自然と肩に手を置いたり、手をつないだりして記念写真に納まる二人を見るのは、準備の疲れを忘れさせてくれます。これからの帰路どんな会話をして帰られるのか、さぞかし和やかな時間が流れるだろうと想像し、私たちまで嬉しくなります。それは、新婚当時とは違う温もりのある二人が醸し出す、二人だけの雰囲気だと思います。その雰囲気が周りを包み込んで同じ気持ちにしてくれるのでしょう。

最終日には、四国コミュニティのメンバーに加え、MEウィークエンドを体験した神父様やブラザーなども出迎えに来てくださり、賑やかな分かち合いの場になりました。私たちは、これからも一番小さな教会である夫婦を大切にして、共に歩んでいきたいと考えています。多くの方々のご協力とご支援により、四国でMEウィークエンドを開催できたことをここに感謝申し上げます。

参加した皆さん

「幼稚園における宗教教育」テーマに研修会

桜町教会　多田　洋

九月八日、四国カトリック会館にて、カトリック高松教区幼稚園連合会主催の「園長・主任研修会」が開催された。「幼稚園における宗教教育」が全体テーマとして取り上げられ、教区内幼稚園から約六〇名の園長・主任・教諭が参加した。まず、午前中に溝部脩司教の「ドン・ボスコ教育法よりのヒント」と題した講話があった。この中で溝部司教は、ヨハネ・ボスコの生涯とサレジオ会の発足を振り返りながら、サレジオ教育の基本に触れ、その柱として①権威と懐の深さを併せ持つこと　②事前に問題の芽をつみとる予防教育　③楽観主義・柔軟性・共にいる人であることを基礎としながら相手が好むことをする教育　④自立への歩みを目的とする教育と霊性の四点をあげた。午後のプログラムでは、日本カトリック幼稚園連盟常任委員の森本禮子氏による講話「幼稚園における宗教教育の手ほどき」が行われた。森本氏は、「カトリック幼稚園は転換期を迎えており、今こそカトリック幼稚園の心の教育が必要とされている。」と述べ、①生命の尊重　②他者への気づき　③自然とのかかわり　④平和問題への意識づけ　⑤静かな時間　の重要性を強調した。また、独自の教材をもとに作った宗教カリキュラムを紹介しながら、今後の宗教教育の在り方を探った。

今回は短時間のプログラムであったが、時機を得た有意義な研修となった。

医療のともしび（6）
～認知症～

「ぼけてしまえば、本人は何もわからなくなるのだから幸せですよね、まわりは大変でしょうけど」という言葉をよくきく、そんなことはない。長年、痴呆を病む人たちとおつきあいしてくると、彼らの喜び、怒り、哀しみ、楽しみがはっきりと見えてくる。そのこころの世界は、私たちのそれと地続きである。見ようとしていないだけである。：小澤　勲「認知症とはなにか」

最近、私は認知症の人「患者」と時間をかけてつきあっている。彼らの物忘れに対する、不安と恐怖は私の想像以上である。考えてみれば当然であるが、不安と恐怖は更に抑うつ状態をおこす。このとき横にやさしい認知症を理解している介護者がいる時、不安と恐怖心は、少なくなる。

最近、充分でないが有効な薬と、適切な介護の方法が見出され進歩がみられました。

46歳のとき、アルツハイマーと診断されたクリスティーンさんは、「これまでの認知症にたいする見方は、健常者の外からの見方で、認知症をかかえる者からすると誤解に満ちている。私たちの気持ち、不自由を理解してかかわってください」と主張する。「自分が自分でなくなる恐怖がある」という彼女は、更に「私はあなたと一緒にいる一瞬、一瞬を楽しんでいるのだから、たとえ貴方がだれかを覚えていなくともいいではないか、私と貴方をつなぐのは、名前や経歴でなく、ふたりの間に流れる感情なのだから」

認知症の知識と理解が急速に進歩している。医師である私は戸惑っている。認知症に医療がかかわるのは少しで、多くはまだ介護の対応によって、その人の生活が決められている。

善通寺教会　医師　橋本　雍

フランシスコ・オルザイス神父を偲んで

九月二七日、フランシスコ神父様は天に召されました。私には、まだ信じられないことです。今でも教会のインターフォンに声を掛けると「ちょっと待ってください。今降りてきます。」なんて神父様独特の口調で返事があり、姿を現しそうな気持ちがしてなりません。

フランシスコ神父様は、スペインのナワラ県出身で七人兄弟の長男としてお生まれになり、一一歳のころに聖フランシスコ・ザビエルの影響で神学校に入学されたそうです。それから一九六五年、スペインのブルゴスで司祭に叙階され、直ちに日本へ宣教に来られたそうです。以来四〇年以上、とくに坂出教会の主任司祭として熱心に活動されました。

フランシスコ神父様は、いつもユーモアとウイットに富んだセンスの持ち主で、どなたとでも実にフレンドリーに接していた印象が記憶としてあります。そして、モータースポーツに造詣が深い方で意外でもあり、驚きでした。

フランシスコ神父様、長い間ご苦労様でした。そして、有難うございました。

坂出教会　小野雅之

主な司教日程

11月５日（月）　特別司教臨時総会
６日（火）　司祭評議会
８日（木）～９日（金）
サレジオ会黙想参加
10日（土）～11日（日）
会計説明会
13日（火）～15日（木）
日韓司教交流会
17日（土）　青年の集い(徳島)
18日（日）　上智大学史学科学会
19日（月）～20日（火）
福岡神学校講義
23日（金）　東京神学院訪問
25日（日）　被昇天聖母会
創立者列福記念祭
12月２日（日）　キリシタン史研究会
理事会
４日（火）　司祭評議会
９日（日）～22日（土）
ローマ アドリミナ
24日（月）　桜町教会ミサ
25日（火）　桜町教会ミサ

お知らせコーナー

新講座のお知らせ　11月５日から

聖書に生きる

“あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが、聖書はわたしについて証しをするものだ。”

ヨハネ福音書5章39節

講座の在り方は「聖書100週間」の方法論を基本に、100週間で全聖書を完読することをめざす。みことばと出会い、研究し、分かち合い、祈ることを狙っている。

テキスト　旧・新約聖書
講座日程　月曜日　10：00～12：00
11月5日（月）開講
（祝祭日と冬・春・夏休み有り）
参加費用　3,000円（資料代）
講　　師　西川康廣助祭（教区本部事務局長）

高松教区青年の集い

テーマ：きっかけはミンダナオの風
～来なソンソン♪♪～

今回は、ミンダナオ（フィリピン）で難民救援活動をされている松居友さんを講師に招き、分かち合いを行います。（面白トークが聞けるらしい！？）友達も誘ってみよう！高校生もぜひどうぞ！

期　日　2007年11月17日（土）15:00
～18日（日）15:30
場　所　カトリック鳴門教会・鳴門聖母幼稚園
参加費　2,500円（18日の昼食は各自負担）
対　象　青年・高校生
受洗者・未洗者問いません。今回から高校生も参加できます。
問い合わせ
ブラザーハ木信彦
TEL/FAX：(088)872-3672
e-mail：tk-youth@mxi.netwave.or.jp

投稿記事募集

【テーマ】
いじめなど少年を取りまく事件・事故

【投稿要領】
字数は３００字以内（写真歓迎）
「所属教会名、住所、氏名」明記のこと。
中傷・誹謗はご遠慮下さい。
原稿はできるだけメールで送って下さい。
写真もデジカメで撮影したものはメールで送って下さい。

【投稿先】
メール：tk-koho@mxi.netwave.or.jp
郵　便：〒760-0074
高松市桜町１丁目８－９
カトリック高松司教区広報担当
ＴＥＬ：087-831-6659
ＦＡＸ：087-833-1484

９月１日付け　高松教区司祭人事異動

「司教総代理」
イスマエル・ゴンザレス師（旧：松永洋司師）

２００８年３月まで暫定的に担当司祭として任命
「坂出教会担当司祭」
濱口秀昭師（旧：フランシスコ・オルザイス師）
「小豆島教会担当司祭」
佐藤直樹師（旧：濱口秀昭師）